

ダンゴムシのうんちはどんな形かな？

岡崎市緑丘保育園(愛知県岡崎市)

[3・4・5歳児]

<ダンゴムシのふしぎを見てみようプログラム>

3、4、5歳児の混合クラスぞう組では、3歳児はダンゴムシを捕まえたことが嬉しくてカップに入れ宝物のように大切にしている。しかし、4、5歳児になると何か物足りなさを感じ、捕まえても遊ぼうとする子は見られず、それ以上の関心はないようである。そこで、保育者は「ダンゴムシに触れる機会を多くし、子どもたちと一緒に不思議に気付き、もっと知りたいという思いに繋げていく」ようにした。(当初は意図して関連する本の設定をしない)

事例1 ダンゴムシはどこにいるのかな？(4月中旬)

4歳児T男、A男は虫にとっても興味があり、保育者と一緒にダンゴムシ探しをする。数日前より、幼虫探しをしていたこともあるのか土を掘っている。なかなか見つからないので5歳児Y男に聞く。Y男「知っているよ。こっちだよ！」とチューリップのプランターをどけるとその下にダンゴムシがいた。4歳児は嬉しくなり「Y男はすごいな」と思った様である。Y男は昨年からの経験ですでに知っていた。他児も興味を示し、ダンゴムシ探しが始まった。

ダンゴムシマップ作り・・・「ダンゴムシの友達と敵」 T=保育者

ダンゴムシが多くなってきたので5歳児と保育者で保育園のマップを作り、ダンゴムシを見つけた所にシールを貼るようにした。毎日、探しているのにシールがたくさんになった。ダンゴムシマップを見て話し合う。T「どうしてみんながたくさん遊んでいる真ん中にダンゴムシがいないのかな？」5歳Y児「みんなが踏んで死んじゃってるんだよ」T「砂場はいいのかな？」5歳I児「かわいてるよ」Y児「乾いているからいいんだ」M児「真ん中にも1ついるよ」I児「散歩に行ってるんだよ」Y児「ダンゴムシは濡れてるとどこにいるんだよ」S児「ダンゴムシはミミズと仲良しだよ」「だって落ち葉食べるって聞いたよ」Y児「そうそう、仲良しだね」I児「アリがたくさんいると食べられちゃうからいいよ」「アリは嫌いだよね」

[分析] 子どもたちがダンゴムシを見つけた時の場所や、状況など体験したことで感じたことを伝え合っている。話し合う機会を作ることで確認できるようである。



事例2 ダンゴムシを飼ってみよう！～何を食べるのかな？～

T「ダンゴムシは何か好きかな？」5歳児I児「はっぱだよ」M児「枯れた葉っぱ」Y児「バナナだよ」4歳児I児「バナナを食べるときは手がないからお母さんがむくの？」3歳児T児「バナナは猿だから食べないよ」「はっぱはイモシだよ」3歳児T児「飲み物はどうするの？」5歳児I児「なにも飲まない」Y児「水」I男「オレンジジュース」他にも「つくし」「コンクリート」「おせんべい」「みかん」「牛乳」「こんべいとう」などいろいろな物があげられる。5歳児は今までに経験した中で知ったことを話す。3、4歳児は自分に置き換えて考える特徴があるように思う。実際にダンゴムシに与えてみることにする。翌日4歳児I男が家からリンゴを持ってきて、ダンゴムシに与える。すると、リンゴにつかまっている姿を見て「食べてる食べてる」と大喜び。

[分析] 子どもたちの「ダンゴムシは何か好きなのか」の基準は、見てなくなったとわかる事で判断をしている。

脱皮した皮を見つける

5歳児Y児「この白いの脱皮した皮だよ!!」と感激し知らせる。みんな興味を示し覗いている。「すごいね!」3歳児T児「違うよ脱皮はザリガニだけ!」と自分の体験したことで主張する。脱皮はなかなか目にするのが難しく、早く取り出さないとタンパク質源にするため食べてしまうようである。保育者も感激する。

よくわかるように皮をテープでとめ黒画用紙に貼る。

休日に少しダンゴムシが死んでしまう

T「どうして死んでしまったのか」と問いかける。4、5歳児は「水のかげすぎ」「土をつぶしたから」「触りすぎたよ」「足でつぶした、踏んだ」「転がした」「リンゴを食べなかった」と言う。3歳児は「白いご飯、ケーキ、団子を食べなかったから」と自分の好きな物を言う。

[分析] 4、5歳児は自分たちのダンゴムシへのかかわりを思い出し反省をしている。3歳児はダンゴムシが葉っぱを食べることがピンとこないようである。子どもたちの気付きを大切に飼っていくようにし、命を大切にすることに繋がってほしいと考える。



事例3 ダンゴムシのうんちはどんな形かな？(5月上旬)

飼育しているカブトムシの幼虫のうんちを見つけたことからうんちに興味が湧く。

5歳児に聞いてみると、クワガタは「長まる」ザリガニは「細くて長いよ」と言う。T「じゃあダンゴムシは？」4歳児「バナナの形」「レモンの形」5歳児「人間と同じ形」等、思ったことを言う。



枯れた葉っぱがたくさん入っているので取り分けて見てみると、葉っぱの上にたくさんのおんちが見つかった。肉眼でも解るが2～3倍のルーペを使って見るとよくわかった。5歳児Y児「四角いよ！すごい！」4歳児「電車の形！」と言いく似た形で表現をした。実体験でわかったことが嬉しくて他の保育者にも教えに行く。見てみると本当に四角いのでみんなで共感することができた。

考察

始めは3、4歳児が興味を示し意欲的に観察をしていたが、この頃では、5歳児が関心を示して中心になり、活動をしている。ダンゴムシと関わることでいろいろなふしぎを感じたり、見つけたりすることでさらによく見るようになり、学びに繋がってきていると考える。子ども達の気付きに寄り添い、見守っていききたい。

事例4 ダンゴムシの赤ちゃん(たまご)!!見つけたよ!

4歳児A児「先生、みて!これたまご?」とダンゴムシをつまみお腹を見せる。お腹が黄色になっている。Y児が本を持ってくる。「卵だよ!すごい!」他児も次々とダンゴムシをつまみお腹を見る。すると、10匹位のダンゴムシに卵がついている。子どもたちは嬉しくて興奮気味。卵のことを赤ちゃんと言っている。赤ちゃんをどうするか子ども達と相談すると、違うケースに入れることになる。入れる物は子どもたちが自主的に考え、土、落ち葉、石、木の枝に決まる。土は、Y児「花壇作りをした土がいいよ」と言い、「園長先生に貰いに行こう!」とどンドン行動に移し、ケースの中は土で山を作るなど工夫されてきて、ダンゴムシも喜びそうである。“赤ちゃん大きくなる



背中に黄色の点線があるのが雌だよ!

るといいね”と興味関心が高まり、愛着も感じたようである。5歳児は3歳児に赤ちゃんのことを伝えている。3歳児「どうやって産むの?」「病院に行くんだよ」4歳児I児「アリの病院に行くんだよ」5歳児「食べられちゃうよ!」3歳児「お腹切って生まれるんだよ」「じゃあ、ダンゴムシの病院かな?」等、自分が病院でお母さんから産まれたことを聞いているので同じように考えている。分けたケースに入っている雌と卵に、5歳児S児「この子お父さんいなくて寂しいんじゃない?」と心配する優しい気持ちを感じられる。

ダンゴムシの赤ちゃん大きくなったかな? (6月下旬)

子どもと一緒に観察を続け、卵(黄色) 卵から出る(白色) 茶色と赤ちゃんの変化を見る。ルーペで見ると、小さな足も何本もあり、お母さんと一緒である。(お母さんと同じ大きさになるには1年かかる)

ダンゴムシに変身!

ダンゴムシを飼い始めてから、あちらこちらでダンゴムシになりきって表現する姿が見られた。そこで、隣の部屋をダンゴムシの家に見立て表現遊びをする。5歳児M児「アリが来たら食べられちゃうからこうするんだよ」と足をきつく抱えて顔を隠し、知らせる。他児もまねる。T「鳥や蛇が来たらどうする?」3歳児は「丸くなる!」と体を丸めるが、5歳児は「丸くなってもだめだから、葉っぱの下に逃げる!」と机の下に隠れてじっとしている。暗いところを好むことを良く知っている。

考察

ダンゴムシに始めはあまり興味を示さなかった5歳児がどンドン夢中になり、中心になってダンゴムシの不思議を見つけていた。さらには3歳児にも丁寧に伝える姿が見られ、頼もしく混合クラスならではの育ちを感じた。保育者の思いから絵本等を見せないで、子どもたちがどの様に感じ、捉えるのかという子ども主体にまかせ進めたことで、子ども同士の会話も多くなり、卵を発見した時の驚きは心を躍らせる感動に繋がったと考える。3歳児はダンゴムシを見る時、自分のことと近づけて考えることもわかった。3歳児の中にも本からの知識で話す子がいたが実体験をすることで、他児と共感することができたと考える。ダンゴムシの不思議に出会い、不思議をしてみることで小さな命の誕生の場面を見ることができ、命の大切さ、心の豊かさの実体験に繋がりと、科学する心が育まれたのではないかと思う。

みどころ

見つけたり触れたりすることが比較的容易にできるダンゴムシは、3歳児にも身近に親しめる虫です。3～5歳児までの混合クラスで生活する子どもたちがその虫の不思議に興味をもつことで、情報や感動をみんなで共有しています。5歳児が意欲的に活動することで追求することも話題の深まっていること、年齢ごとに発達に応じた特徴的な感じ方や表現をしていることなど、保育者が活動内容や幼児の発達などの理解をすることで、「科学する心」の育ちを把握することにも結び付いています